

個体差に配慮した包括歯科臨床への取り組み ～咬合再構成を中心に～

国賀 就一郎

兵庫県 明石市 開業

永続性のある咬合再構成に取り組む際には、画一的な診査・診断・治療・メンテナンスを施すのではなく、患者個々の個体差（例えばカリエスやペリオのリスクの有無や硬軟組織のバイオタイプ、咬合力の大小など）を識別し、対応することが大きな要点になると考えられる。

また、いわゆる力と炎症のコントロールを図ることで、最小の侵襲で最大の効果を求める包括歯科臨床を行う際には、歯周・歯内・修復・補綴・審美・インプラント・矯正・咬合といっ

た各分野の処置を集積するのではなく、病態に陥った原因を推察し可及的に排除した後に、どう立て直すかといった指針が必要となる。

特に顎口腔系に大きな歪が生じたケースでは、従来の補綴学的な診断・治療のみでは対応が困難で、下顎位・機能的咬合面形態・口腔外圧・リモデリングということに着目した生理学的なアプローチを行うことが求められる。

今回は上記の現在の取り組みを、症例を通して解説したい。